鳥山袁

甲

へ5
1908
1

鳥山彦

甲　綾錦後編

沾涼述

一 去来ノ歌百首　誹諧去嫌
一 本式誹諧の辞略
一 千句ノ法并万句矢数洲潟の事
一 四季の正花雑ノ正花并誠の月月次
一 新宗匠并宗匠変名
一 印金抹説并点印譜
一 古今付合変化の説　附中興抹点式
一 古来付合高点抹句

一當時付合秀句

一四季乃発句并和歌

一前集異説抜粋略

島原びと上巻

綾錦後編

崔下菴稿

凡謙諧去嫌抜書ハ建治の連謌舊式應安の新式
を根とし御筆を初めとろくの
未書あまたあれ共道あきらけく遠事分
茲ハ京大岡秀吉云ハ紹巴義乃敵せしと
連歌式目の歌二百余首ありその奥云ハ云
右依御所望式目ハ和歌二百廿六首令
今案進上令ハ當代乃風可不過之ハ有增
紹巴在判

右の和歌い連哥の法式はく俳諧のくにいたるに安
うしたがひてきびしくひろうの達きを者うと近き世用ひ
七台去い五台去くゝ五台去い三台に半ゝ成い又二首、
三首を一首に減めゝて百首に続る是
いにしへと自眼を加るにわるに巖室に古書
古法を守るにわるしたをを結ぶと号大練舎に
入きれを初無まのあきたなんと奥出せるぬ朋人初
心の歌びとなゝ書林文刻堂の天て印刷を
へきのすゝ市まれてようそのんにまいふあるに
ゝを達人の見るへきにあるに

紀巴翁の去燭三百餘その歌を抜ゝ今
きいにしへく用めへきぶを御傘に井号
かゝるあるこの書より拾ひて三十一字に並めれ
奇に似るうへより似るすゝら奇といふへ
とあるまゝたの志をう奇とをいふ

誹諧信打歌百首

紀巴翁の奇を
ものに入るもあり

花の座　初おとそ独吟なるその四句めの末花いせに

月花　正花四つまこの月い八なまとあのゝに大ゝいせに

恋秋　平妙よ恋の秋此白付きたゝも恋の秋めてたゝもべきなゝ

うゝあのワキのゝらに袋のゝ。
のワキ　柳一なゝいハひよいせに

祝言

移宅

餞別

追善

付白嫌

同

同

付白朱嫌

同

同字別吟

同

兆生類

兆水辺

兆産分

兆倫

兆居取

兆名示兆山数	名の神ハ名示によれバ山織や 本名ハ兆山敷なりし
兆意兆衣数	織の女や。市女。かつら女。意なれバ 常ハ夜数にあらさると志るべし
五色	赤(アカ)。青(アヲ)。黄(キ)。黒も四ツなし。白ハ八ツ 志ら志ろうちくとかへ七台去
五性	本ハ字去。火ハ五台。土ハかハりし 金ハ一台去。水ハ三台去
三光	星ひかり。日ハ三台去。月ハ八ツ 月次(ナミ)三台。日次二台去
月	若月。夕月ひかり。雪を入て 三ケ月ふろうまで明ハ三ツ
一文字	一の字ハよミこ意かハり七台去 おかしとかへハ西かへし
数字	二より十の数字西によりひかりはらく 百。千。万ハ四ツあるとしれ
支解	顔。眉ハ二ツ。面(テ)とも。面(モ)も四ツ おもて。おもと。めん。かへ七台去
同	爪(ツメ)。髪や鬚。髭一台。毛ハ四ツ 人の月ハ八ツ。おの月も八ツ
同	歯(ハ)。口びる。耳。鼻一台。口八台 胸。肘。膝ハかハらずあるなる
同	指(ユビ)二ツ。腕ハ一台ず。手ハ八台 足ハかハらず。そくびをかハし
時分	暁と昼ハ二ツず。時ハ八ツ 夜ハ三台去。朝。夕ハ四ツ
大小	大(ダイ)。杉風。たかいひくて六ツ。小字去 みじかきハ三ツ。長七台去
代世	こよ代(ヨ)三ツ。世(ヨ)ハ六ツあるべし以ぞ 佛の世あり代と世字去なれ
前後廣狭深浅厚薄	前。後。廣。狭。落(キ)。浅(キ)。八ツ 深ハ字去。厚キ四ツなり

一座一句 近き物大略	京。こゝ。田舎。店。町。藪。陣。城。宮。いと。石。ひと。
同 器	金。銀。錢。長刀。弦。弓。矢。墨。筆。紙。ひと。
同 人	父。母。親。兄。おと。おと。あね。いも。ひと。
同 人	男。女。出家。侍。僧。尼。妻。仲人。乳母。ひと。
同 食	食。汁。湯。茶。酒。餅。肴。薬。命。老。ひと。
奇物	饗。俎。谷。の関。岡。坂。の砂。穴。蘖。種。二句あり
同 水	海。渕。滝。沖。灘。汀。鳥。渚。磯。津。淀。渕。ハ二句あり
同 水	湖。川。流。堀。江。池。沼。橋。堤。井。沢。滝。滝。ハ二句あり

同 虫魚	蟬。蛍。蛍。ハ乃むし。奥。二句あり。鄙。香。人。ハ二つ
同 草	柳。さくら。桜。花。芋。ほし。そこ。菊。苔。すき。むし。藻。ゆり。
同 雨	夕立。一つ。雨。さめ。あま。二つは。あめ。さめ。ハ七句去
同 寺社	寺。堂。院。庵。塔。庵。居。庵。ハ二句あり
同 風	春風。秋風。松風。二つは。入て。又。ハ二句あり
同	春。きく。多。き。恋。君。文。人。ハ二句あり
同	香。匂。布。紙。袖。衣。国。乃。庵。布。鬱。むし。柳。ゆり。あり
同	虫。蝶。柳。花。長。家。ゆり。あり。居。ゆり。家。ゆり。

同	契 別	恋の句には一つ。恋の句四つ ちぎりは二つこそあるべし
同	馬 駒	馬。駒。駒として二つあり。むまやちハ るゝ。駒とるとも七句去べし
同	今 古	今朝。今宵ハ二つきのふ。今も一句 今は月ふもきらいさうり
同	宿 村里	宿。やどり。古里への新。窓。棚。二つ 村ハ四つあり。里三句去
三句物		身は入ムや。俗。旅。海。竿に。常。 辻乃あけぼの。垣ハ三つあり
四句物		家。屋。戸よ門と。右。左。貴。賤。や 咲。枝。梢。玉ハ四つあり
同	神佛 年	神。佛。志んじんぶつとうハ四句 年にハふるよ。終んかるあり
同	雪霜 霧露	雪。霜ハ四つあり。霧ハ季をかへよ 霞ハふるりよ。露三句去
同	鳥	鶯。雉。鶏二つ 名のなき鳥ハ四つ 鳥も四つあり季をかへてせよ
同	麻 国	麻ハ四つ。国よ。森の字や庭の字等 綿も。ぬまよろむ。七句去べし
同	恋字 御字	恋の字や。天ハ云人。御も四つ ヲシ。ミ。ギヨ。なるとも七句去べし
		一座一句。二句三句四句。すべて皆 恋字と名所ハ方よあるべし
折端		ひらりしに縁や。むしに縁め人も。 桐よるみら。折きしふし
同		下級ハ下帯に折きしかし 衣紋。表合と云る去べし
七句去		匂ひよ香。鈍よさしかや。笹に志の。 薄よさんさく。七句去べし
同		老よ志つら。雪よふできる。基よね基。 夕と夕べ。七句去べし

七句去	神にかゝり。園よりまつや。名の明。別れてよりきぬ。七句去
同	桃よりも。花や。岩ゝ。ゆ。ゆ。七句去
同	似せもの。歌。の。雨や。雪も。大。面。雪。大よい七句去
五句去	夜。季や。竹。田の。松。浦。浪。五句去
三句去	月。雲。よ。野。山。浦。川。浪の。石。草。木の。原の。雪。三句去
同	山。影や。月。人。山。中。行。袖。の。影。三句去
同	旅。夜。秋。神。祇。釈。教。恋。恋。常。述。懐。夜。月。居。原。三句去
同	獣。多。く。魚。く。む。と。出。おなし。歌。ひ。三句去

二句去	本。竹。草。魚。虫。けもの。名。ある。歌。ひ。二句去
同	人倫や。名。和。虫。鳥。二句。風。ふ。の。
同	月。よ。天。象。ふり。地。そ。ひ。き。と。の。
同	人。よ。天。人。よ。ふ。ま。に。被。
同	人。よ。ふ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。二句きゝ。
同	人。ふ。耳。に。ゆ。を。も。言。よ。考。
同	加。編。雲。ひ。へ。の。多。ひ。よ。も。二句
同	分。わ。や。雲。の。色。も。下。ふ。へ。も。
同	草。ま。む。ゝ。ゝ。ゝ。物。に。二句。
同	末。五。楊。朝。よ。形。も。二句きゝ。

同	さくら。石楠花。あらそふ流下花なと二句多くつゞけ
同	あやめ。あやめの明ケ。郭公。蛍。きぬ衣類。二句きゝ合し
同	本よりなきぐ。蛍よりアヤ。蛍よ国。蛍よりあり。二句きゝ合し
同	蛍の句に蛍。きぬ。きぬ。きぬ。二句きゝ合し
同	食類。半俳。夫婦。二句多くつゞけ
同	萩の影。てとめ。にとめ。也。成も
同	新。とこや。嫁。よ中。立も二句。
同	おりんめとく。二句きゝ合し
同	ふのめ。〳〵。分句ちりて

春秋	春。秋。五句より多くつゞけ。二句四句
夏冬	夏。冬。一句に多くつゞけ。平句に三句つゞけ
戀句	恋。北句。五句。一句で接。二句より
三句續	神。釈。一句ふとこと三句つゞけ
三句不續	衣類。生類。植物。名所。国の名 一句に多くつゞけ三句つゞけ
同	人倫。天象。一句に多くつゞけ三句つゞけ
流留	上下の句に多くつゞけ
千句一句	鬼。女。千句一句。鶴。亀。龍。虎なと

誹諧といふ物を活法に作して手にもち翫
せよとみなを流行く思ふは万葉の歌の
東曲をもみな歌のうちへ入れども　善哉
中古をも作れども　後柏原院文亀元年
西三條内府牡丹花肖柏　勅をうけて其を
新式今案を定め給ふ紹巴も是を一定して誹諧
昔はおかしの事に此道を一つとして私なし物世にはり
是へ安らんは其重宝へしと天縁を挑翁跋

濱の海さとあり大とは思れぬ無量ならし合
なんを此百首にそまりんや蒼海の
一滴を破りみすくまくもの

本式誹諧の辨略　用於連歌之法

表十句　表のうち名所は除之
初折の裏十四句　二三の折も常のごとし名の裏六句也
景物なくして三句をへだつるは又其越嫌ふべし
月と花と雪と郭公と麻苧とを月も折
越をきらふ
花　是は一句ずつ　都合八本也
桜　四本　但表に花裏に花と桜をまじへ
月　是は一句ずつ　都合八ッ也
名所のうち六句の内に月花ある句などの花と

[illegible]し若発句の百番ちかくなれば表の発句[illegible]
他の事の発句にも自然[illegible]発句の[illegible]
句ひの発句ハ他事[illegible]

同事七句去　但百に他の事を加[illegible]

六句[illegible]五句去　隠物　聳物　草木　各二句去

月花松舟景洞竹煙等十句去し

岩猿関檜槙草　山郭[illegible]

発句、賦物多く連歌よハ五ケの賦物　俗松山人の[illegible]

定[illegible]文字あり洲潟[illegible]と無[illegible]字を入し

右ハ慶元年に改[illegible]式目に[illegible]の新式の[illegible]

○千句の法并万句矢数

千句八百韻十巻し発句十句花四　春三句　夏二句

秋三句　冬二句　[illegible]十句ともに花ハ[illegible]月[illegible]

[illegible]法あり春部の発句ハ[illegible]

[illegible]の切字[illegible]ある切字[illegible]宜きし

題ハ初春。霞。梅。鶯等[illegible]俗[illegible]

発句十句の内雪月[illegible]名鳥木の京物[illegible]

一度一句の内あり[illegible]風。亀。龍。鬼。女等の[illegible]

[illegible]句無[illegible]八十百韻を一日に満座[illegible]し此時十巻

の表八句を無日に[illegible]し　是略義とのへ[illegible]

古[illegible]あり[illegible]

○時

○續千句と云あり是い卷頭の発句一句をうけて
海〻の九百韻い発句ゟ〻もとも九百韻も表の
不を八句よりはとんとも神祇尺教恋雜をせぬ
法令もあり〻に発句ある〻称も分三の別りもなし
○方句八百韻百卷に発句の割そのゟ大槩
ゟ句に准を古来い独吟し矢数俳諧と云近世
人数をあつめて無りもとるし
○矢数 句の結〻のことひに 文臺 八脚十徳 玄旨其宗匠の人に
句見 時の宗匠文臺に 執筆 連衆を撰て 鳴鐘 千句目くゝ
一人はゝ副 数人
此ゟ宗匠ゟ人の数〻のゟあり大概を記すべし

○四季雜の正花并四季雜花月

貞徳云抱別正花になるゝ物をもとの物をもとゝ
更〻義なれとも連歌俳諧をとるゝよい義
不ゟ雜花句用〻き時ある事〻に発句をとるゝ
雜をも雜に出るし雜〻ゝ
花月をもとゝ近世二句の花をもて正花ゟ用ゝ
旨表に撰て植物に二句きゝ物ゝとるゝ点ゝ甚
宗匠を辨ゝ 文集物云捨ゝ八仏教のん意ゝ

○春花正花 植物に三句去の分

花の都 句後ゟ使雜ゟ 花の江戸 月上 花の姿き 風雅

○上二

花の雲 雅物　花の浪 同　花筏 同
花の雪 花山と書るもの　花の山 花山と書るもの
花籠　花入　花生　花籠 同　花皿 同
花車　花軍　花かご　花傘
花園 宇治の宮の御所に花の園 花の陰 花を詠ずる
花の御人 伊　花の友 人倫にあり　植物 二句去の分
○春の正花
花の衣 衣類　花の袖 同　花の紐 同　花の瀧 同
花の露 花の歌 同　花の雫 同
○雜の正花　植物 二句去の分

花江葉 三句去　作り花 三句去　中雜 同　花路 同　花江 同
○雜の正花　植物 二句去の分
花の姿　花の形　花の粧　花嫁 人倫　花聟 人倫
花の縁 衣　花鰹
花歌　茶の湯香　花の香　花の色　花の蜜 つぼの蜜のある
花の名言　○繪の花 表にかりそめの人物にあり
○夏の正花
除花 三句去　落葉 植物　落花 植物
○秋の正花
花火 夜ふけ人物にあり

○冬の正花

梅の花 三句去　俳諧うくものよ二句

○非正花

花梅 梅の花にはなをむすびていとしたしき白梅のよそほひ　花野 野の花

花十子 花四色の浪の花　雪の花　花の帽子

○秋此月

名月　今宵の月　新月　名残月

三五夜　良夜　後の月　月待　栗名月

十三夜　十三夜　盃の光　玉兎　玉乃兎

玉磬　月の蟾　蟾蜍　嫦娥　望月夜

上弦　下弦　有明　月華　月光りやうひかり　まこと月の月かげ

桂影　三ヶ月　小望月　望月　十五夜　不知夜　十六日

名残の月　居待月　十七日　十八日　寝待月　十九日　臥待月　廿日　立待月　廿三夜

○非夜分月

三ヶ月出　月入　残月　夕月　夕月夜

月花　桂の花　朧月夜　朧月　朧月夜

○春の月

朝の月

○夏此月

月の霜　月の雪　夏の月の光を霜にたとへ月の影のふるまひを雪に似るとなどいひなしたてまつるなり

○冬の月

雪の月　さゆきの月　月の氷　あさぼらけなる月　霜の月　組の月　霜の月

○雑の月

月雪花　一日にむつまじく雑まじり　心の月　天数しらに飛ぶ　胸の月　星

或云胸心の月は秋の月なり　花の月　夜分の月　花と月

なるものゆゑ　其宗匠よりなるべきなり　古法いかゞのゆゑ

○月次の月

春の月　初雲月　むら月　梅の月　春惜む月

夏の月　さつき月　卯月　夏月　如月　七月

秋の月　きく月　紅葉月　霜月　冬月

さ夜ふけ　ふけまさる

○義なるゆゑ水洋こゝあり前集成てきのみと

源をなして出て春林流五とせの春より

滅に源泉混くとして書をなす後復俳諧の

英雄あり宗匠となる人多く依て誰渠い

綾錦に裁ゝる人多し得る人折として有る

源くの宗匠を沼界に加ふる書よいあらと

書賈の答ずむつかしとて其屬なる宗匠

沼儲を或ハ其点印譜を茲にあつ少年と

なるゆゑ唯惟晴軒に俯して背を負り我独

あ所にあるものゝし

享保十六亥編集

○綾錦後宗匠并変名宗匠

沾洲門
鈴木羊素　前松琉或云鈴系　元無倫門人十二後心保立志三物組合
弯明展　續父喪德改羊素古羊素高井立志門人
享保十七子冬披露　居石町二丁目

変名
深川老鼠　前湖十　享保十八丑変名
木者菴　又云鼠肝一　居浅草寺竹門

老鼠息変名
深川湖十　前永機　續父喪德改湖十享保十八丑
一黙香　又云巽窩　居堺町北新道

変名
堀尾調和　前和推　續師喪德改調和
敲栟堂　享保十八丑春　居本芝

調和息
堀尾和推　前和交　續父喪德改和推
敬而菴　享保十八丑春披露　居濱松町三丁目

音峨門
西門存義　前泰里
李井菴　享保十九寅春披露　居吳岸嶋長崎町

立志四代目
浅見立志　前如格　元副介我
和樂園　和階堂点印至和敬才今立志附屬之
享保十九寅冬披露　居飯田町坂

貞佐門
富岡有佐　前露圓　先師点印附屬之
露〻菴　享保廿卯春披露　居小石川指谷町

沾洲門
今村幸德　前石泉或云黒尺元佳風門後為沾德門
裏中舍　享保廿卯春披露　居和泉町

局菴門

笠家舊室　前岳雨　始老嵐几下
　　活〻土　享保廿卯夏披露　屋同師

一漁息　鶴海晋阿　前傘車或豆花
　　堤堂　享保廿卯冬〻披露　屋同父
　　浅草御藏前代地

麦名　笠家局菴　前逸志或一志
　　素竹斬又半局菴　享保廿卯冬〻改〻之　屋浅草寺竹門

常仙息　志村長鶴　享保廿一辰初夏披露　居同父
　　神田明神下

○印金乃説

点印の因まゝて記

印金ハ或記曰三史五經を三道と云て則記傳明紙明法と釈し其記をあきらめの義なり吉備公の決音韻。筭術。明法。篆籀。五經。三史の六道よりあて人間心法の真実をあきらめたるものハ印金し故よりの法と云神の代より其教をうけ其本の真を見し疑なを晴し滅を尽して其本を止るを明法と云太古ハ人の心直して真言を云其事を故事を真古〻呂比真古登と云人の代る至て人心かろ〻真言をかすとの〻ろ甚変り十五代

若桜宮（神功皇后の宮）三韓を攻ひ韓王未代日本の
降人なり人事を掌て自手の筆をもて書とは形
の権輿しとて文章理万物にあるて心を尚る和
ハあるとの〻ことし然一心をもつる書道し上の
詔をはあ下として詔勅に至りて其姓名を
去り集を心真をあらはし故に未代よりあり
る事物等も其印あるを正とし印なきハ不正ス
○或云姓名の下に印を私印と云あるハ
姓名字卿の四つを合せて四印と云又出姓
印の端に志を関防（トウ）又方の印とよ見い筆者の

是より奥の名印ある所まて吾書とハ限り
跡をもるすゆへし家い肩の印又直印と云し
其印の形を竪長くして直なる故し
法ハ書出ス文字より一寸五分右ヘヒラリ上江巾六分ハ字府見
四印としてよい

姓 蘓氏

名 軾印

字 子瞻

卿 東坡

卿 楠氏

官 河内判官 字

姓 橘朝臣

名 正成 此四ツ

点印譜

改 八前集 爻ノ後改ル所ノ点式ナリ 有余前集ニ

仁智鳳凰 十、九章 十七、芝蘭玉樹 十五、凌雲意 十、
至河漢 七、朱褒 朱爲服書 各一点ノ加増 朱 九、長 三、 羊素

改 不盡 十五、長安花 十、雪月 七、各朱書之 墨印
朱雁 五、墨雁 三、九 二、 老鼠

改 半面 美人 准句 芭蕉 十五、一日長安花 十、
洞庭月 七、越雪 五、長 三、九 二、 其角点印也 湖十

改 金精 十五、海棠 廿、洞庭湖上 十八、娥眉山 十五、
明列 十二、銀輪影斜 十、廣寒府 七、朱 五、長 三、 貞山

設儿案 准句 二十以上 雲井ノ花 十五、殘雪 十、
芳野山 七、朱 五、長 三、九 二、 和推

秋雲羅 准句 錦上加花 十五、蜀江錦 十二、
呉綾 十、金綺 七、珠 五、長 三、九 二、 和階堂点印也 立志

玉姿 十八、回文錦字詩 十五、花影上欄干 十、
新月色 七、回雪 五、長 三、 貞佐点印也 有佐

神龍 二十、龍依積水蟠 十五、澤養千年 十、
幽能明 七、朱 五、長 三、珠 二、 幸德

雪中翫 二十、軒端 十五、疎影碎長月 十、
千歳栽 七、朱 五、長 三、 舊室

秀逸 准句但シ限廿五点ノ 花王 十八、香錦 十五、
玉冠鈿扇 十、秋萬鈴 七、朱 五、長 三、 晋阿

江湖十八、十二字十九、八字十、四字七、朱五、長三、　長鶴

改 秋夕（准句）浦笘屋十五、鵶立沢十、（擂歩菴）槙立山七、朱五ノ長三、九二、　超波

改 閏余毫二十、餘毫十五、即揮毫十、（桂坊）餘朱七、朱五、長二、（各以朱書之並印加沾徳点式）　沾山

○誹風変化の辯

凡那繻の風い元和寛永の頃洛長崎九より堅く口立圃松江維舟ゆり寛文の頃ずて大和ゆりて是を古流と云延宝のころ難波の西山宗因流林の派風を起し天和貞享の時分伊東信徳富尾似舩斉藤如泉椋庵流御蔭流中興せしも是を古風と云蕉翁流青歌と云ワの流の時なしと連歌よりしるかざるをもて云ゆるゆよりの発句も付合も異なる句か

俳諧芭蕉翁の風い連歌の系（ケイフウ）なるとも古流の
俳諧（ハイカイ）との厳中かをとりて優艶に寄てゝる上品
俳風なりとも都鄙統てあまねく傾きやすなり
又天保の三年より晋子甚て酒落（シャレ）俳諧とて付合の
一体を起し芭蕉翁如河曲一般大野氏和尚等其英
等の宗匠合弾して当時の酒落と云俳諧の謎字の
解釈数て古今と一白の訣別なり当流正風孫と云い
是に名づけつゝ此の枕と云書を編し北蕉俳生
原俳諧とのへれ小冊を入其巻を言をもして正風
化鳥くらべと誹諧しるるより兼江法俳諧二流

よりの狂ぬ芳賀一鼎い当流に離出て自の一流を
立てゝ其翁をしてゝ後水間沾徳に伝り頃年
まるむしの舊門流よりかゝるし立羽不角（今千名ハト云）
その頃より今の流絶かゝる息不扁寿角乃二士
益一流を立て他の俳風とかゝるし
○直の直い長を限しゝ面顔に長直三白直
九孔重なと平直てよお婚れる時の直おくあり
直てなる句七十余もあるい親撰の巻とせるゝ孫
の中頃まても直印おさ宗匠多ゝ
高野迷山い擢（カヒ）の形の直し片朱雙朱の五直限

岸本壺甄斎 調和ハ増朱。雨朱ハ六点を限印なり

宝井其角ハ乙点てゝそしの字を点〳〵甲の印なり

服部嵐雪ハ図長。探荷。探昌の文字を彫り印なり

今の千翁ハ文朱。立葉。雨葉六点を限印なり

芳賀一鼎ハ風〳〵の点〳〵の下。金羽。雄禽。雄禽印あり

高井二代目立志ハ玉聯。金綺。金章の印あり八点限り

天野大白堂桃翁ハ桃花。更衣よろ八朔。重陽の印あり

大野秀和ハ紅葉藤紫梅銀菊金あるも乾の印

佐保介我ハ川朱の字の点。農。御彼。浮雨印あり七点限

河曲一蜂ハ彩長。銀長。金長六点限り印なり

各五七点を限り文孫卯辰巳須一統に点印を

鄭ハ十五廿点を褒美に其角に逢を可なりとい

せざるしるしとも世の人なるとも厚字の点のわるく先

今御十の所属ならぬ印を設け尋常なる十点

をかゝひの限りかの字風とゝ乾ハ半面美人

の印を五十点とし極く英の印とし是ハ他の十五二十

乃点以顯然なるのみし其月のなハ

天人句まゝ

天人句天井ハ大円心を引あげゝ

此影ひの白しと茶鑿をかく

○古來付合高点乃句

○松永貞徳判　　鶴冠井令徳独吟百韻

前句　[illegible]

長足　[illegible]

前句　[illegible]

長　[illegible]

○同　判　　安原貞室独吟百韻

長瓢　[illegible]

長　[illegible]

前句　[illegible]

長月　[illegible]

○同　判　　松江重頼独吟百韻

前句　[illegible]

長神　[illegible]

前句　[illegible]

長か　[illegible]

○野口立圃判　　服部定清独吟百韻

前句　[illegible]

長[illegible]　[illegible]

前句　[illegible]

長月　[illegible]

○高井一代目立志判　　九吟百韻

前句　[illegible]

長 鶏の石はれ枝こそ老の役なれ　古　調和

前句 流るる花車に乗る大名

長 幕際を乗るこんつき　卜入

石田未得判　四隆百韻

前句 ぬる白絹い寒ト雪る

長 ふるまいの花の朱あるを切く鳴　幸雄

前句 まのゆうるもとをぬすび

長 芦うの鶏うるかしろく鳴め入　政勝

▲右百句春に長二句三句五句より多き不見是等ハ一句の秀逸なる句を作出す旨なる句ある人し諸ゟ時代なる和歌時に初学の人ゟ如ゟ

○当時付合の句

頃年俳諧付合のとゝいひ[illegible]ゟ

光宗匠達乃頃ゟ[illegible]ゟ誠なるゟ初文刻堂

[illegible]一ゟ[illegible]ゟ[illegible]朱の新梓なあ[illegible]

[illegible]ゟ[illegible]ゟ続花摘。[illegible]集四季の花。菊畑

東千句。紙ひこ。江戸八百韻。合あ[illegible]。反歌。禁葉

一[illegible]馬[illegible]ゟ[illegible]ゟなる俳ゟし甚書[illegible]

ゟ和人の[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]句[illegible]を拾ひて

左に記ゟ必ゟ句のゟに限ゟ[illegible]ゟ称ゟ人ゟ

[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

前句
雪踏のぼるくくあるく貴　青峨
前
志そ〻ぶ鄙の鄙ふるきに
雜巾に其角も走る長廊下　超波
前
仏殿の仏の居る上り畳
私ら出ます古い物さう　半渓
前
とそ〻しく並べ神くの机
麻せるに翌朝春をたくきの也　魚貫
前
参詣のうつる利休ちひさに
夫人ようよう答てる牡丹にく　老鼠

発句
出店のみに注れるあつるあ
明やりにまけて涸き竹　湖十
前句
おらてきけそうひます未
悪紅の多るえいなうなり　菠鶏
前
人をまつる前分此色
傾城乃いびきうそあ是れ　素九
前
義勇の後の跡乃まれ風
宿りうと紅よ鶏牧屋く撫　超波
前
おいしい所の吹まうあ
丈トーやと出ます屋る不後し　石丈

前 上向 言に船のをさまり
三味線になるとなり 櫻の月 采仲
前 飛鳥ちるとまる作さくり
湖 藤波遠北に及ぶ所之也 如簑
前 宿さくの月刺して居る法の新
昼のほるのあるらしさよ 大梅
前 つつの頃よりの鰹のうち賣り
きの茸いは法まあといきぬさうし 其蒼
前 縋うけうまぬ後て寿を削
ゆきうきと知るべきの日あるう 樗山

前 恠出して就書紙を見るう
人よかるを生きて居るし 魚賀
前 あさちきにをるをを牛
唯一ツ月にはおるる星 沾山
前 雜のきさっ乃法
居て盛り内飯乃膳へ日の暮 可客
前 若のきせるとはるかう
ちきのの遠まえをきのけて 湖十
前 つつ恠とかりとる就
高艶竜かりめて酒のし 起波

四季乃発句并和謌

春の部

海のうへよ玉ゝを投ー世界の空　千翁
出来合の炭点る井戸のあるじ　沾涼
一番の化物なるまつや梅の花　琴月
むめうゑたる毎ゝにて長る蔭うれ　賀朝
正面も那ゝよる聖平の梅は兼　麦阿
梅咲や常に咲る新ゝき　未石
布ー年に片枝さひ梅の名　東隣
師走よりさむき日もありむめの花　沾涼
明際の雲ゝつゝきむすんのうれ　五百武
梅ゝ咲ゝ日ゝ雪ゝなれる　横川

中くゝい梅ゝ色ゝの氣迫の花業か　琴峰
青柳よりおぼるゝかるゝ星月夜　珪琳
降る雨のつゝひて咲る梅うれ　布仙
人別ゝ多ゝ咲ゝ胡蝶か　有佐
根切ゝ吹ゝ梅ゝ咲ゝ　梅五
ゝ雨ゝさゝゝ咲ゝ　倫仙
梅ゝ咲ゝ安ゝ高ゝ　羊素
沙汰ゝ梅ゝ浪なゝ　沾涼
ゝ咲ゝ狸の御ゝ　一漁
雨や馬ゝ栗の表ゝ　魚路
ゝゝゝゝ人今ゝ人　千楓
大海ゝ降ゝ花月や　涼之

[illegible]

山夕

貞山

漁友

鶴ヶ谷 素流

涼巴

玉賀

文岳

沾涼

千那門 江列産 千梅

江陽 蕉用一老

千那

[illegible]

之恒 [illegible]

[illegible]

[illegible]

牛御前の[illegible]東行南行日遲[illegible]長命寺

似せもの〳〵 雪とも花の 翌 なるべし 沾涼

寺僧院の芝生つゝまれたりまゝ [illegible] 泰尹 [illegible]

[illegible] 吉廉法尼

[illegible]

[illegible] 重栄 魚海

[illegible]

[illegible] 沾涼 [illegible]

かくりなくしこそ
朔の月をなつかしむ船を待る事につけり　女 嘉代
うらうらの船をめつらしき橋ごしの業　清渓
網舟をまつけ得る魚を釣られし落て鮎の
油なれば生きとしよめ業ハ女中達　千楓
白髪の年ころいひなめきそ信ずるなれば時しも藪の
つゝみ乃其のほとりにさへあり
神の木や常ゝの樽乃雛かし　魚路
去る樂の名を潜くし藪林　清渓
あかふしく
咲花の名も出て見えなきまゝくるゝ人を悲ける梅垣　与庸法尼
玉椿八千代ときけば春を今しめのまゝ京のたちむかしを　海原氏女カヨ
神酒の哉春咲かしきしまへし玉振今も候なり　房竹　沾涼丁

○夏北部

時鳥声のうきうらし残精か虹　沾山
小僧さけ寐ぬる夜なる夜も声を起し　存義
在ての耳をさわぐる哉月とききき　鳩ケ谷 燕子
薄えよむ年の縁さあや保しさ　沾涼
岩倉の色でこそいまこし米とくき哉　倫仙
谷あいの空を声のあり夏木立　雪朝
鳴る北声も冬さぬ若葉かげ　雙五
青国て見えも日傘や若楓　鳩ケ谷 蛙音
夕立や今朔人かへし松の色　中田氏女 友子
暑さのまいかきうすき花の木　豊後 左隣
若竹ゆ今朔か雀の巣かな　湖十

獵投て　鵜に飛も夏の夜
賀朝

夏草や下り水の魚乃骨
長鶴

あり乃る蝶の羽ばたきよりの紙
尾谷

花乃色も百合も富士の面あり
乾什

緑乃ときとなる多い志て四つ角
音都

地獄の水よりとりや　五月雨
布仙

ゑの色を藤さもよ春こう切こ多
風香　音里

夕立や下ゝ雨も中つ
吏登

一部ゝ吹夕立の白ひ和
溶て

照て中よ志つ志しろ郷雲
土武

苔の根を志ら絲うへさるゝあつさ
百洲

葉もゆ見ん志ゝてあつさ
沾凉

松の琴ノ志ゝ風も涼してあつさ
秩父川　沾橘

ひゝくゝとゆきて照てあつさ和
魚路

笄の笠へも志ゝくもゝこの郷
琴月

降る い雪の物ひて動き深ゝ
大宮駅　涼牛

抹香も乃て深ゝき　鶏　菴ン
呉竹

志ゝ志ゝ中蝉ゝきれのあり
梅五

志ゝ志ゝくを宗を志ばゝ中ゝ
沾凉

藤を一さ中帆人のある蝶の沈
末石

谷川ゝひゝ志つる蝉も流れ
布仙

つまひ時は志るにあ藤ゝ志る
音城

ひくゝひゝ流ものほ志るゝ和
漁友

蝉中夕中角一ゝの竹の和
局菴

享保十八子故郷　天満宮に詣

今しかも産屋著の香あり神の梅　　沾凉

法林寺文盃の廟に詣

高き木末須磨の花の雲　　〃

一族へ背

斧の柯の朽ちもはて百年の春　　〃

静女八幡宮の姪にして京門葵の新うつり

笠置にくの句のすゑ尺七を得る　　菊園女　静女

清し咲ふ山や秋の萩の露

俳別三吟　源平東武西海の合戦

伊賀　太田猩々

冷るさの神の社庭の苔の花

京うげへむかふる神やぎをうしく　　〃　菊園紀之

麦の穂も実のかくやさるる風　　〃　服部涼佐

俗世界に侍る

新樹陰　今生きてる古宮の白い明く

生涯の白い明く　　沾凉

○秋の部

蛙蛙乃水よ　馬北耳　　琴月

氏綱を空にかりの夜　　萩波

牽牛の尾　跡尺余の畑　　蘇子

庭を巡る日々　風乃音　　沾凉

蓋にしも多入風と聞よう　　雙五

名をうの秋を重ねあるさ　　布仙

風雅とそもよ書つる庭の秋　　賀朝

雷てなしまつ更せる庭の春　　沾凉

喫の酒星清一房北中　　和推

いろくる日の西まるを紙外　　来川

庭よりはく待ますくきあり外　　魚路

杜鵑の打ち出すかと聞く紅葉哉　幸徳

枝出して流を新色の紅葉哉　梅五

さつきうと船いそぐ楝の葉　江陽　千梅

新月や沼の鳥のよるへ哉　音里

夏山の今青かりしを光り哉　梅子

名月や不動堂の灯はあを　梅條

須磨の馬て唯石へ来る春の月　軽羅亭　小扇

山家秋　永西　谷素泉

つけもの桶と言るは秋の雨の素泉て言る　房州　沾涼子

世中の人のかい船まはしたる色者やをのこ哉　湖水　馳望

ひるのそるさなそれ夕虫の鳴くは清田の長雨

友も船き老の類ひや雁ゆく　曹柴軒　千洗

出ん山おくて流より江戸の月　沾涼

十ゥの月八つあるか船乃ゑ　涼宇

ちる菊の柳もちらく秋の人　沾涼

野ゝ哉や花見の時の竈の跡　小秀氏　笛之

船の月や馬に乗入る若　殺父小川　沾橘

嘶さうく秋と流るゝ千机のあそび　沾涼

清工舎布仙子と連て正燈禅林寺の

ゝちい高雄の紅葉なるゝ江戸秋ふる人

何とおく京の匂ひの下をゝち　雪朝

ゝちの宝の花いよ紅葉なを紅葉して流るゝ

よまゝとさうゝ竜田ゝ紅葉を紅葉なるゝ

その紅の赤もとも照り船んをゝちゝ　布仙

いそ紗のこし給の下州に移りし海に接る石あり
海村国は技芸に奔しとなるも秋さいある
きの出いふるひとしてしての岩あるといふなし

雲の行る芦を見りし下つふさ　沾涼

うし嵐すそ　紀行の名は看く

ぬれしとや芦も紫こそ神の花

息栖の浜の女瓶男瓶は海中にありその中なる
ひとつは沈みとなりてのこるはしる石のみ

神垣やとしふるまゝの神さひて

香取の中にて

出るも神代の松の匂ひ哉

○冬北部

松のみ友乃とはしきし　老鼠

霜くのあまりの霜のかしこ　舊室

すゞしやくゝもかみ北見　調柯

凡流のあくの袖や月　音聖

許しく石を移して枯野なる　萩波

植の葉にきさき雪やむかしの跡　沾涼

あれの跡ふり雉ももる　魚路

庭むいて枯るゝ藪の裏　涼之

川音や更て揚鼓の汀哉　東巴

菜の花をむすひ合てこん氷　梅五

渡し守もそよ雪の空　雪朝

雪降りて姿やらしや慈留　竹郎

花の表紅葉の秋も我の雪　布仙

心陰や子に盞をするも牡丹　琴月

大浪よりくらられてこれにちらす
川辺もあはけて多くて千尋なる
三葉四葉の松よりはのさしさうる
四つあるこの鯉の呑む蓮葉に
折ふい浪のちるる蓮葉に
ひとこの庇をうくく本の葉うる
氣はつもの第ふる蓮葉に
ちらくく本の葉の菴部に
ひとも鯛いよるとやしるぬ
大海日雑ふ枕乃鶴の夢
悠然くく月夜の明て大海日

月もはるとうたる浪ふ平潟ふ
いよるとる花のとく浪

常仙
東隣
沾涼
晋阿
賀朝
露月
錦志
沾龍
涼宇
潭北
沾涼

茂長 川勝春菴

豊後國由原山八景

八幡宮奉納

神羽 榎花 高ひ一ぬ花の国よりとゆくる紅

四極ふ 彩翔 神の戸 ：：のくまの鶴ふ山の葉

殺生 拾蓋 一ふ八重ふ魚まより朱て長宗なり

二葉ふ 時雨 青あにーたりける苔の姿ふ山

笠張 舟 笠張帆舟も見えうタ時雨

清市 商客 神ちくのそれと雪の顔つ

本陣ふ 書 清ふ雪いふまとそ来人花ふ

古宮 背 姿して牧月よ白ひや神乃私

桓口左隣拝

孤立舎 左隣
本者庵 老鼠
飛来亭 魚路
黙々斎 音峨
素姓 丈岳
釣月堂 一漁
紫井谷 雪朝
崔下菴 沾涼

○前集異説の解

連歌師宗砌　連歌宗匠の権輿は侍従と隨流は書にあり又連哥師より身あれど宗匠の門あり宗砌ばかりは連歌の宗匠新在家代々の系譜なれども祖は宗砌沢い心敬専化とはきて俗は流の流の末々なり前集に其類ひを考へ百五代後柏原院大永の頃の人也宗砌は時代侍従は二條良基公の頃の人也良基公は百一代後小松院應永の頃より百有餘年前なりよりて今類ひを解

良基公江別石山寺の御會を應安の頃と前集にあり應永の出来ばかりに前判改

二代目の心敬僧都は百二代　称光院の御宇とあれども應永正長の時代より前と符合

宗祇　宗砌　牡丹花　守武　等は同一時代にて百五代　後柏原院大永の頃の人也

三光院實澄公　叡実（技トモ云）　実條（実條ト誤）　宗長　宗牧等は百七代　後奈良院天文永禄の頃の人也

九條政山公　幽斎　惺窩　紹巴　宗鑑等は百八代　後陽成院天正慶長の頃の人也

近衛龍山公　貞德　五圍以下は百九代　後水尾院慶長寛永の頃の人也

岸本調和　前集に京安静と江戸徳元門人の
両説を記せ仮空軒安静門人より使也

岩本子英　前集に松樂軒立志門人と記せ非し
野陽松叔春陽軒加友門人にして其の子英八[illegible]
乾什の先師なり

樋口山夕　前集に高島玄札門人と記し非し
石田未得門人にして或い一代目の立志門人と云説も
[illegible]

[illegible]千足尾谷　今い沼淵門のすし
志水盤谷の集来梓格集[illegible]より尾谷と行法の
南捐い[illegible]の門人にして中にも尾谷い高弟と
[illegible]尾谷い[illegible]の郷産にて[illegible]
[illegible]

上巻終